太陽が欠けた日

メガネ

「生まれてから一度も見たことがない。メガネがあったら見れるのになぁ…」

ある日のこと、村でお世話になっている家のお母さんが言った。お母さんが家事をしながら聴いているラジオでは連日、日食が起こる日時や観察時の注意点などが報じられていた。日食が近づいてそわそわしていたのは子どもだけではない。大人の間でも日食が話題にのぼることが増えていった。

ブルキナファソの農村での調査中、私はある家族の一員として受け入れてもらい、「娘」として暮らしていた。そこでの私は、20歳の妹を筆頭にした6人の妹と弟をもつ「長女」である。そこにお父さんとお母さん、居候の女の子を加えた10人で寝食をともにしていた。



写真①日食メガネ

ブルキナファソでは、2013年11月3日に日食があった。日食とは、地球と太陽の間に月が入り、太陽が月に隠されて全部見えなくなったり、欠けたように見えたりする現象のことだ。日食を見るためには、目を傷めないようにするための専用のメガネが必要になる（写真①）。

そのメガネは、ひとつ1,000フラン（200円程度）で売られているのを町の薬局で見たことがあった。高すぎる。そのメガネがひとつあればうちの3日分の食費になるし、村びとも私も大好きなモロコシ酒（モロコシという穀物を原料に造る地ビール）が8リットルも飲める。「一瞬で終わるイベントのためにそんな高い買い物をするなんてどこの金持ちだ」と、これまでメガネをちらりと横目に見ては、目をそらしていた。

そこに冒頭の、お母さんからの遠まわしなおねだりだ。…ほかでもない彼女の頼みなら仕方がない。私は重い腰をあげて自転車に乗り、炎天下の舗装していない道を、30分かけて町へ向かった。

日食の前日だからか、メガネは半額になっていた。自分は損をしていないのに、雑な値段設定に憤りを覚える。「これからもっと値下がりするんじゃないの？」心の中でブツブツ言いな

がらメガネを手に取ると、弟たちの顔が浮かんだ。「ええい、半額だし！」と、勢いよくもうひとつメガネをつかみ取り、レジに向かった。

日食についての噂

昔、村で日食があったときの様子をおじちゃんが教えてくれた。太陽が陰り始めると、農耕民はアンテロープというウシ科の動物の角で作った笛を吹いた。鍛冶屋は鉄を、音楽をなりわいとするグリオは太鼓を、女性は調理に使う長い木べらをそれぞれ叩いた。あたりが夜みたいに真っ暗になったので、そうやって太陽と月にゆるしを請うたという。村は彩り豊かな祈りの音色に包まれたことだろう。

話を現代に戻そう。村では「日食の時は夜みたいに暗くなって危ない」とか「外に出ると目が強く刺激されて、もし太陽を直視したら目がつぶれて一生見えなくなる」という噂が流れた。その日をどう過ごすのかは、村びとの最大の関心ごとだった。モロコシ酒は造り始めてから販売までに３日かかるが、計画的にその日の販売を避ける者もいた。酒場は屋外だから、酒を売っている間に噂みたいなことが起きたら大変だと考えたのだろう。客が少ないと予想した者もいたかもしれない。

私の家でも噂を受けた備えがあった。うちには家畜として飼っているウシやヒツジ、ヤギなどの放牧を頼んでいる少年がいる。彼は朝早く家に来て、庭につながれている家畜を連れて出かけ、夕方に帰宅するのがルーティンだ。お父さんは、日食の日は何が起こるか分からないから、朝出かけたら日食前に一度帰宅し、日食が終わったらまた放牧へ行くようにと彼に言った。

太陽が欠けた日

いよいよ不安と期待が入り混じった日食の日が来た。家でそわそわと待機するのは、仕事に行ったお父さん以外の家族に加え、いつもうちに遊びに来る従兄の妻と娘３人、伯母と子ども３人の合計17人という大所帯である。ラジオでは11時半から14時半の間に日食が起こると言っていたが、それよりも早くから太陽が隠れ始めた。みんなで家の中に入り待機している間に、私は昔覚えた天体の知識を記憶の底からひっぱり出した。予定時刻は首都での時間だったのだろう、ここは首都より西だから先に日食が起こるのかな、などと考える。お母さんが門番のようにドアの近くに座ってしばらく外の様子を見ていたが、いつもとなにも変わりはない（写真②）。

お母さんが促すと、子どもたちはおそるおそる外に出て、順番にメガネで太陽を見始めた。始まる前からうきうきそわそわしていた子ども

たちは、2つしかないメガネを奪い合い、「月みたい！」なんてはしゃいでいる（写真③、④）。あまりにも楽しそうなので、自分のドケチぶりを密かに反省した。お調子者の一番上の妹は、その日に市場で見つけた紫色のドレスまで試着してご機嫌だ。メガネをサングラスに見たててモデル風のポーズをきめている。私と末の妹も悪乗りして、撮影大会が始まった（写真⑤）。もはや日食そっちのけだ。

今回ブルキナファソで観察できたのは部分日食だった。太陽は端がすこし隠れた程度。部分日食でも辺りが暗くなることはあるらしいが、太陽は大地を照りつける手を緩めることはなかった。そんなわけで、一通りメガネで太陽を見終えると、みんな飽きてしまった。家の中で待機することさえやめて、それぞれ好きなことをし始めている。お母さんに至っては外にござを持ち出し、昼寝の体制を整えて横になった（写真⑥）。

日食が終わったときには、一大イベントがあったことなんて忘れたかのように、完全に普段の



写真②日食が始まり、家の中で待機しているところ

生活に戻っていた。「日食終わったよ」と一応お母さんに声をかけると、「あーそう」と返す寝ぼけた声。結局、みんなの分までメガネ代のモトを取ろうとしつこく太陽を監視し続け、夜まで頭痛にあえいだのは私だけだった。



写真③観察に一番乗りをした末の妹と、横から手を伸ばしてメガネを奪おうとする一番上の弟

日食を終えて

日食のときはどう過ごしたかと村びとに聞いてみた。日食が始まった途端、噂を信じて窓やドアを閉め切り家に閉じこもった人もいれば、噂なんてお構いなしでいつも通り村をぶらつき、その日は多くなかったモロコシ酒を探して飲み歩いたつわものもいた。

うちの家畜を放牧する少年は、そもそも来なかった。代わりに一番上の弟が放牧に行くよう命じられたが、サボった。罰として夕飯抜きの刑に処せられたが、これも無視して食べた。その日の夜、妹たちと私がねぐらにする離れの女子部屋まで、母屋にいるお父さんの怒号が響き渡り、私たちは目を合わせて肩をすくめた。



写真④「初めて日食を見たアフリカの人」のポーズでふざける2番目の妹（左）と真剣に日食を見るお母さん（右）

後に本人が笑い話として語るまで気付かなかったのだが、一番上の妹は、日食が始まり太陽が黒くなっていくのを目にすると、なにか黒いものが部屋に入ってくると心配して女子部屋の窓を閉めにいったらしい。あのドレスでポーズをきめて一緒にゲラゲラ笑っていたときに、心の中ではそんなことを考えていたなんて。

神代ちひろ



写真⑤撮影：末の妹　モデル：一番上の妹、筆者



写真⑥昼寝の体制を整えたお母さん（左奥）と、日食メガネで遊んだ従兄の娘（手前左）と末の弟（手前右）